○丸井座長 それでは、定刻となりましたので、第4回「食物アレルギー表示に関するアドバイザー会議」を開催させていただきます。

この会議につきましては、2021年の2月15日付けの第1回「食物アレルギー表示に関するアドバイザー会議」における申合せ事項の3の(4)に基づきまして、会議、議事録等は原則として公開することとしておりますので、公開にて実施いたします。

しかし、その中に「自由な発言が制限され公平かつ中立な審議に著しい支障を及ぼすおそれがある場合、又は個人の秘密、企業の知的財産等が開示され特定の者に不当な利益若しくは不利益をもたらすおそれがある場合」という項目がございまして、それに該当すると考えられるような議事、あるいは資料の一部については非公開とすることにいたしますので、御承知いただければと思います。

さて、本日の出席状況ですけれども、構成員の穠山先生から、大学での会議が重なっているということで、それが終了したところで間に合えば合流されるという御連絡をいただいております。間に合わない場合には欠席1名ということで、そのほかの先生方には御出席いただいております。

また、今回はオブザーバーとして相模原病院で海老澤先生と御一緒に全国実態調査等にも携わられていらっしゃいます、食物アレルギー研究室長の佐藤さくら先生にも御参加いただいております。

○佐藤オブザーバー 相模原病院の佐藤です。よろしくお願いいたします。

○丸井座長 ありがとうございます。

さらに、消費者庁の事務局にも異動が今年度ありましたので、現在の担当者から御挨拶をいただいて、資料の確認、そして御説明を併せてお願いしたいと思います。

では、よろしくお願いいたします。

○宇野課長補佐 消費者庁の宇野と申します。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

丸井座長より御案内いただきましたとおり、事務局に異動がありましたので御紹介をさせていただきます。

審議官といたしまして、6月28日付で依田が着任をしております。着任の御挨拶とともに、会議の開催について発言をいただきたいと思っております。

○依田審議官 ただいま御紹介いただきました消費者庁審議官の食品担当をしております依田でございます。本年6月28日付で着任しまして、ようやく半年ほど消費者庁での生活が経過したところでございます。

アドバイザー会議の先生方におかれましては、それぞれ専門的見地から御意見を賜りまして誠にありがとうございます。

今回、第4回の開催に当たりまして、私の御挨拶とともに一言、本会合の位置づけとい

うものを改めてご案内させていただきたいと思います。

まず、本会議の位置づけを確認させていただきますと、本会議の開催の背景でございますが、厚生労働省が所管していた当時から実施している調査でございますが、平成30年度に公表しました即時型食物アレルギーによる健康被害に関する全国実態調査、いわゆる実態調査の結果におきまして、くるみによる食物アレルギーの症例数が急増しており、食品表示基準を改正する際の諮問機関になっております消費者委員会食品表示部会においても、食物アレルギー表示制度の義務表示化というものを検討すべきではないかというような御議論がありました。

一方、厚生労働省が所管していた当時のように、消費者庁自体には専門的な見地から御意見をいただくような体制がないということもありまして、医学あるいは分子生物学的な専門の先生方に考察いただくなど、当時の研究班のような体制を想定してこのアドバイザー会議を開催することになりました。

以来、食物アレルギー表示制度の適切な運用のために、医学的あるいは分子生物学的見地等に立った専門家の御意見を伺う場として、先生方の御意見をいただいていたということでございまして、今回第4回を迎えることとなりました。

後ほど事務局のほうから御説明させていただきますけれども、今回はくるみを食品関連事業者に対して表示を義務付ける特定原材料に移行するという改正で、しかもこれは表示の義務化に伴う経過措置期間が必要になりますので、2年間ほどの経過措置を設けさせるといった内容の食品表示基準の改正案を、消費者委員会に諮問いたしまして、先日、13日付けで答申をいただきました。

内閣府令の制定、各省協議等はございますので、こういった手続を経て、早ければ来年度からくるみが義務表示対象品目となるということでございまして、平成20年にかにとえびが特定原材料とされて以来、十数年ぶりの特定原材料の追加ということになります。まだまだ特定原材料の指定、あるいは今回の諮問に当たっての消費者委員会の中でもいろいろな御議論はあって、結局はくるみを義務化することについては御了承いただいたわけなのですが、改めてこの特定原材料及び任意の表示を推奨していく特定原材料に準じた食品、こういった対象の考え方も含めて課題があることを認識しつつ、まずはくるみの義務化を先行して実施させていただきたいということとなります。

本日は、この表示義務化の答申の結果報告をさせていただくとともに、併せて医学的、分子生物学的な見地から専門の先生方の御意見をいただければと思っておりますので、よろしく願い申し上げます。

私からは以上でございます。

○宇野課長補佐 続きまして、食品表示企画課長につきましても異動で新たに清水が着任をしておりますので、一言御挨拶をいただければと思います。清水に関しましては、ウェブ参加となっておりますので、画面から一言よろしく願いいたします。

○清水課長 食品表示企画課長の清水と申します。よろしく願いいたします。

本日は諸事情により、ウェブ参加となり大変恐縮ですが、今後とも引き続きよろしくお願ひいたします。

○宇野課長補佐 以上をもちまして、異動の御案内となりました。事務局の人員が少し変わりましたが、先生方、皆様、引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、冒頭カメラ撮りのみの方につきましてはこれで退室ということでよろしくお願ひいたします。

(冒頭カメラ撮り、退室)

○宇野課長補佐 それでは、改めまして事務局から資料の御案内に移ります。

資料はホームページにも掲載をしておりますけれども、御説明をいたします。

最初に、議事次第、構成員名簿となりまして、次に「第4回食物アレルギー表示に関するアドバイザー会議(資料一式)」の中に、資料1として「くるみの義務表示化に関する進捗」、次に資料2として「コーデックス食品表示部会」の資料となっております。

構成員の皆様方におかれましては、資料に過不足がございましたら事務局にお申しつけください。

なお、進行に当たっての留意事項ですが、ウェブで参加されている皆様は御自身の発言時以外はミュートにして、発言される際にはミュートを解除して挙手の上、お名前をお伝えいただいてから発言をお願いいたします。資料のほうは大丈夫でしょうか。

それでは、これ以降の進行は丸井座長をお願いいたします。

○丸井座長 事務局のほうから御挨拶いただき、また、資料の確認をしていただきました。

それでは、具体的な本日の議事を進めていきたいと思ひます。本日は、くるみの義務表示化に関する進捗状況として、先日開催されました消費者委員会食品表示部会への諮問の審議状況についての報告、そしてコーデックスにおける動向についてという順番で進めたいと思ひます。

まず、お手元にごございます資料1を用ひまして、先日開催された消費者委員会食品表示部会の状況などについて事務局から御説明いただきたいと思ひます。お願ひします。

○宇野課長補佐 それでは、「第4回食物アレルギー表示に関するアドバイザー会議(資料一式)」の中から、資料1の3ページで「くるみの義務表示化に関する進捗」。

4ページ、「消費者委員会食品表示部会への諮問」です。12月7日に開催いたしました部会における説明資料の中から、食物アレルギー表示関係を抜粋して御報告をいたします。

なお、先ほど依田審議官から説明をいたしましたけれども、部会への諮問に関しましては昨日12月13日付けで答申が出ておりまして、諮問した改正案のとおりとすることが適当ということで示されております。

では、6ページにまいります。「食品表示基準の改正概要」です。黄色い枠の左側が食物アレルギーに関する事項となっております。現在、「特定原材料に準ずるもの」として任意の表示を推奨しております「くるみ」について、義務表示となる「特定原材料」に移行させるという内容です。食品表示基準の別表第14の改正になります。

【施行期日】として、「公布日から起算して2年間の経過措置を設ける」としております。

7ページにまいります。義務表示として「くるみ」を追加する理由です。3年度ごとに実施をしております実態調査の令和3年度の結果におきまして、平成30年度の調査に続いて「くるみ」の症例数の割合が増加しており、増加が一過性とは考えられないこと、また、食品中のくるみの有無を科学的に検証するための公定検査法の確立の見通しが立ったこと、こういったことを踏まえまして、新たに「くるみ」を別表の中に追加しようという内容でございます。

8ページにまいります。こちらは、直近4回分の全国実態調査の結果をまとめたものとなっております。くるみの症例数、または調査年度における症例数の割合、どちらも増加しているということが分かるかと思えます。

9ページにまいります。左側のグラフは、症例数の多い上位5品目の症例数比率の推移を表したものです。赤い線で示している木の実類の増加の傾向が分かるかと思えます。

右側は、その中の木の実類の詳細を表したもので、中でもくるみの増加が著しいということが分かるかと思えます。

10ページにまいります。木の実類に関しまして、「食物アレルギーに関する表示の諸外国の動向」をまとめております。患者の食品選択の可能性を過度に制限しないという観点から、我が国においては個別の品目で指定するという運用をしております。諸外国を見てみますと、木の実類として範囲を広めに取っている国もありますが、日本といたしましては個別の品目という観点で制度づくりを行っております。

11ページです。これは、過去に個別の品目で指定することがよいという発言が各所でされておりますので、それらを抜粋したものとなっております。

ここまでは、実際に食品表示部会で用いた資料を使つての御説明となりました。

続きまして、12ページにまいります。「消費者委員会食品表示部会における主な発言概要」です。

13ページです。「総論」といたしましては、議題の終了時に部会長から、くるみを特定原材料とすることについて了承の旨の発言をいただいております。これにつきましては繰り返しになりますが、昨日付けで答申も出ておりまして、諮問された改正案のとおりとすることが適当と示されております。

また、「各論」といたしましては幾つか委員の先生方からご意見をいただいております。

1つは、検査法に関しまして、将来的な義務化の必要性を見通して早めに科学的検証を可能にしていく取組が必要ではないかという御意見を頂戴しました。

また、経過措置期間に関しましても、その2年の間には表示されているもの、されていないものが混在する期間なので、事故が起こらないように消費者庁として周知啓発が大事であるという御意見。

また、猶予期間が過ぎても賞味期限が長いものについては市場に残るという観点で、や

はり消費者庁として周知啓発が大事であるといった御意見を頂戴しました。

また、どういう状況になったら特定原材料に品目を追加していくのか、基準みたいなものがあるかということも聞かれました。その際、加工度によって判断基準を分けるべきではないかという御意見でありました。

これに対しましては、消費者庁からは症例数、重篤度、流通量などを踏まえて検討しているということで答えております。

加えまして、アドバイザー会議の構成員でもあります穂山先生が補足をしてくださいまして、加工度等については検討をしている。見た目では分からない、そういうものに関しては事故の可能性があるので義務化になっているという補足をしていただきました。

加えまして今村委員から、加工度が低いいくらとまつたけなどに関しては表示制度開始当時から対象とするかどうかという議論があったけれども、一定数の症例数をもって表示対象としていた。

ただ、まつたけについては今日現在としては外したほうがよいのではないかといった御意見がありました。

次に、14ページで「加工食品中のくるみを検出するための公定検査法の開発」です。

15ページです。現在、公定検査法の開発は引き続き行っている状況ではありますが、定量検査として3社の事業者が開発をしていただいております。定性検査については2社の事業者が開発をしていただいております。

今日現在としてはバリデーション作業に移っておりまして、定量検査法のバリデーションはいずれも問題なく終了したということ聞いております。定性検査法については現在実施中であり、こちら問題ないという途中経過は聞いております。早ければ、今年度中に確立するという見込みであるかと考えております。

資料1について、御説明は以上となります。

○丸井座長 どうもありがとうございました。

事務局から資料一式の中の資料1を基に食品表示部会の状況、最後に検査法の進捗状況を説明していただきました。前回以後、特に問題はないだろうとは考えておりましたけれども、ただいまの説明にもありましたように、くるみの義務化について部会の答申も13日に出ており、義務化の手続を具体的に進めることができるということになっておりますので、よかったと思っております。また、先ほど御紹介もありましたけれども、部会の委員からも幾つか御指摘をいただいているとのことで、今後の取扱いについても検討していく必要があるかと思います。

この資料1につきましては、状況につきましての報告ですので、特に御質問等については省略させていただきますが、何か追加いただくとか、ここでちょっと御発言というようなことが先生方のほうからありましたらいかがでしょうか。お手を挙げていただければと思いますが、よろしいでしょうか。

順調に進行しているということがよく分かりました。

さて、次の資料のほうに移りたいと思います。資料2で「コーデックス食品表示部会」の資料につきまして、再び事務局から内容を説明していただきたいと思います。では、よろしくお願ひします。

○宇野課長補佐 それでは、資料の16ページにまいります。資料2「コーデックス食品表示部会」です。

17ページにいきます。現在、コーデックスにおきまして包装食品の表示に関する一般規格という文章がございます。現在、コーデックスの中でこの一般規格を見直そうという動きがございますので、その内容を御紹介したいと思います。細かいところは幾つかありますけれども、今日は大枠として2つお話をいたします。

1つ目は17ページの赤枠で囲っております右側の部分ですけれども、現在の文章の中に過敏症に関する記述がございます、その中で対象食品が示されております。それらの食品については過敏症の原因となる食品でありますので、義務表示としていこうという整理になっております。今回そこを見直す動きがありますが、現在示されている案文といたしまして、ツリーナッツという記載が今日現在の文章の中では明記されておりますけれども、今の案文ではツリーナッツの中に具体的な品目を明記しております。アーモンド、カシューナッツ、ヘーゼルナッツなどなど、個別に品目を明記するという動きがあります。

今まではツリーナッツという表現だけでしたので、具体的に何を表現しているのかが分かりにくいという状況でしたが、日本の運用に近づいたという形で品目が明記されておりますので、日本としては特に反論するような状況ではないかと考えております。

18ページにまいります。もう一つの動きといたしまして、18ページの右側に示しております新たに予防的アレルギー表示に関する考え方をまとめる動きがございます。現在の文章の中にもう一つ、新たな文書形態をつくらうという動きがあります。予防的アレルギー表示といいますと、含まれているかもしれないという可能性表示のことを申しますけれども、現在日本ではその表示は認められておりません。海外では特に基準がないまま、含まれているかもしれないという表示をしてしまうということで患者さんが食生活の幅が狭まっているというような状況を鑑みまして、コーデックスのほうで今回新たに閾値を設けてその可能性表示を少し制限しようという動きがあるようです。

赤枠で囲いましたけれども、くるみであれば1ミリグラム、カシューであれば1ミリグラムなどなど、こちらは19ページにも続きますが、食品ごとに閾値を設けて、もし可能性表示をするということであれば、これらの数値以上を含んでいるということの根拠をもって表示をするという流れにしようという動きのようです。

日本も閾値を設けておりますけれども、このミリグラムという考え方とは異なりますので、この動きは見守っていきたいと考えております。

資料2は以上になります。

○丸井座長 どうもありがとうございました。

コーデックスはまだ作業中の部会のようなのですが、過敏症の原因物質として従来の

木の実類ですね。ツリーナッツという大分類から個別の品目が示されるという方向に動いてきているらしいとのお話でした。

また、最後のページにもありますけれども、閾値を用いる考え方を取り入れるということも、考えてみますと、我が国における食物アレルギー表示の方針と考え方が近づいてきており、我が国のやってきたことにコーデックスも追いついてきたかというようなことかとも思います。

ただ、閾値という話のときには検査法、あるいは個々の食品の測定の技術とか、実際にそれがどれだけ測定できるかということも問題になってくると思いますので、まだまだ道は遠いように思います。

いずれにしても、このようにコーデックスの中間的な方向性が出されてきたということで、この辺りは先生方から何か一言お伺いできればと思いますが、いかがですか。

海老澤先生、どうぞ。

○海老澤構成員 コーデックスのほうの今回のリファレンスドースというものを出すプロセスにも私は実際に関わっておりまして、経口負荷試験をベースにしてベンチマークドース法という方法で最低誘発レベルというところを求めていく作業というのは、イギリスのポール・ターナーというドクターが中心になって幅広く負荷試験のデータを集めるところに私どもの負荷試験のデータとかも供与してこういうデータが出てきております。

それで、これは1ミリグラムトータルプロテインと書いてあるのですがけれども、基本的には標準的に食べる量に基づいてのということで、ワンポーションと外国の人が言いますけれども、そういうものなんですね。

だから、ほぼ日本の、もともとは数ppmというところで丸井先生と今から20年前くらいにやっていて、それがだんだんセベラルになってきて、それがまた10に近づいてきているんですけども、当時、私がヒスタミン遊離反応等から計算した好塩基球の活性化のIgEをブリッジングしていくためのドースと、あとは吸収効率等を考えて、かつそれが大体当時のELISAの検出レベルがほぼ同一だったものですから、結局最終的に当時の丸井先生の研究班会議の中で穂山先生と、当時の部会にも出ていらっしゃる今村先生と私とでそのところを英断したというか、行政的な判断ということになるかと思います。ただ、幸いなことに日本ではここで今回非常に低いレベルに求めてきている木の実類とか、あるいはピーナッツというのが欧米ほど当時まだ我が国において大きな問題になってきていなかったという側面もあります。

それで、ポール・ターナー医師とも私はいろいろこの件に関してディスカッションしていたのですがけれども、今まで日本でそういう基準を設けてやってきて大きな問題がなかったということなどをぜひ国際的に情報発信してほしいということを強く私も言われていて、穂山先生も同じような考え方なのですからけれども、そういうことも過去のモニタリング調査で実際に表示ミスによって出てきているものとか、そういうことの調査もしていますので、そういうデータあるいは学会等でほとんど問題がなかったというようなところも含めて、

今後情報発信をしていかなければいけないなと思いました。

我が国は、欧米に先駆けて20年ほど非常に進んだことをやってきていて、彼らはヨーロッパもアメリカも、オーストラリア、ニュージーランドも日本の取組に関しては大変高い評価をしてくれています。それで、日本の行政において世界に先駆けてやっていくという事は多分あまりなかったんじゃないかと思うんです。ほかの国の状況を見てからやっていくというところは大きかったと思うので、穂山先生と私とも過去いろんな場所で日本の取組について英語で発表したりとか、論文を書いたりとかしてきているんですけども、今後さらにそういうことを積極的にやっていかなければいけない。

あとは、過去の20年間の全国モニタリング調査を私が実施しておりますが、このデータに関しても、今回くるみとかカシューとかの急増というものをいち早く検出できたということにおいて、諸外国でこういうことをやっている国はどこもありません。ですから、これも今まではあまり大きな変化はなくて甲殻類等の義務表示化というところだったのですが、今回木の実がこれだけ増えてきたことをデータとしてきちんと国全体として捉えていったということは大変大きなものだと思います。それに関しても英文で国際的に発表していきたいと考えておりますので、コーデックスの動きというのはほぼ日本がやっていることを追認していってくれるようなことになっていくのではないかと考えております。

ただ、日本でピーナツ、今後木の実類などが大きな問題になっていったときにいまの基準が果たしてどうなんだろうねということについては言われていますけれども、やはりその基準を設けて取り組んできたというのはすばらしいことであって、may containを許容しないということで、実際に混入する可能性、そして閾値を超えたら書かなければいけない。そういうことが消費者にとって大変大きな意義があって、また食物アレルギーの患者さんにとっても生活の質を大変よくしていったということにつながっていったと考えています。また、国際的ないろいろな情報を得る場がありますので、ぜひ私のほうからそういうものをフィードバックしていきたいと考えております。

以上です。

○丸井座長 海老澤先生、どうもありがとうございました。歴史的な経緯も踏まえて、御意見をいただいてありがとうございます。

確かに、例えばアメリカでしたらピーナツが非常に大きい問題だし、日本ではほかの国でほとんど問題にならない品目である、そばがちゃんと挙げられている。こういうふうには、それぞれの国とか地域の食の在り方とか、食文化というものが食物アレルギーには非常に大きい影響を及ぼしているというところもあるので、必ずしも数字だけではなかなか基準をすぐにつくるというようなことができないところでもあるかと思えます。

また、我が国は先ほどのお話のように、非常にリスク管理がある意味でうまくいっているわけですが、それを検証するため、つまり表示をきちんと始める前と後で本当にどう違うのかというのは研究的に明らかに根拠を持って出せるというのが歴史的な過去の

こととして非常に現在難しいので、なかなかそれを科学的なレベルとして出すことは難しいのですけれども、事実として非常に管理がうまくきたということで、そうするともちろん先ほどのように食の在り方が変わり、あるいは今回のようにくるみの問題、あるいはほかの木の実の問題に少しずつ広がっていくことになってきているように思います。

海老澤先生と私でちょっと言葉を足しましたけれども、委員の先生方、それぞれのお立場でいかがでしょうか。

では、伊藤先生どうぞ。

○伊藤構成員 あいち小児保健医療総合センターの伊藤です。

全体の流れとしては海老澤先生の言葉どおり、日本はすばらしいリードをしてきた部分なので、すばらしいなと思っています。

今回、出されているワンポーション当たりの絶対量という概念が、確かに日本の濃度規定というものと随分違う。

ただ、実際にはワンポーション当たりという考え方も少し適用していかないと、食べる量が非常に少ない食物とか、多いものに関しての濃度規制だけではという印象はちょっとありますので、この辺りを自分たちがもう少しどうやって翻訳して一般のアレルギーの患者さんたちに伝えていくのかという辺りは検討の余地があるような気はしています。

でも、コーデックスがこういう方向に動いているのはすばらしいことだと思いました。

以上です。

○丸井座長 ありがとうございます。

そのほか、この機会にいかがでしょうか。

安達先生、どうぞ。

○安達構成員 安達でございます。

コーデックスの基準についてなのですが、これは先ほど御説明にありましたように、プレコーショナリーラベリングということなので、メイコンテインの基準というような形になるかと思えます。

それで、日本のほうは10ppmというのは、これ以上は必ず表示してくださいということなので、プレコーショナリーラベリングとはちょっと意味合いが違うかと思うのですが、それでもやはり閾値としてどれくらいの数値が海外で重要視されているのかということを知ることが大事かと思えますので、私もこれはこれから注視していきたいと思っております。

以上でございます。

○丸井座長 どうもありがとうございます。臨床のほう、そして検査法、開発等々のほう、両方から御意見をいただきました。ありがとうございます。

特にほかの先生方、付け加えて何かございますか。

今井先生、どうぞ。

○今井構成員 本当に海老澤先生のおっしゃっていただいたとおりなのですが、世

界に冠たる日本のアレルギー表示ですので、これはぜひ先進的な取組を続けていただいて、また文化的な背景がありますので、世界基準は参考にしつつ、我が国の独自の路線というのもしっかり守っていかねばいけないのかなと思います。

ちょっと議論とは違うかもしれませんが、さらに先進的な取組というところで考えたときには、やはり最近の食物アレルギーというのは積極的に食べていこうということになっていますので、入っているか、入っていないかではなくて、どれくらい入っているかというところの表示というのは患者のニーズとしてはありますので、さらに次のステップとしてはそういったことも検討していけると今後はいいのかなと思っています。

以上です。

○丸井座長 どうもありがとうございます。

よろしいでしょうか。

そうしましたら、当初事務局のほうから準備していただいた資料については以上で大体説明は終わりということになります。

ここから先につきましては、現時点で公表していない論文資料などに関する報告を少し個別に実際にやっていただいた先生からお話しいただくというようなことになりますので、初めにお話ししました申合せ事項に基づきまして、ここから先は非公開という形にさせていただきますと思います。

傍聴していただいている皆様には申し訳ありませんけれども、御退室いただきますようよろしくお願いいたします。

(傍聴者退室)

その後、論文資料の報告等を用いて意見交換等を行った。